

「秋風辞」における秋風と雲の表現について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 増野, 弘幸 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6858

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「秋風辞」における秋風と雲の表現について

増 野 弘 幸

【キーワード】 秋風辞、漢武帝、秋風、雲

漢の武帝の作と言われる「秋風辞」について、冒頭の秋の情景と末尾の自らの老いを嘆く表現との関連についての指摘は多い。但、冒頭の表現である「秋風起兮白雲飛」の「秋風」と「雲」との関係についての言及はあまり見られない。本稿ではこの作品における「秋風」と「雲」の表現の意味について考えてみたい。

一、「秋風辞」について

「秋風辞」について『文選』巻四十五所載の全文を示すと以下の如くである。

秋風起兮白雲飛、草木黃落兮鴈南歸。蘭有秀兮菊有芳、懷佳人兮不能忘。泛樓船兮濟汾河、橫中流兮揚素波。簫鼓鳴兮發棹歌、歛樂極兮哀情多。少壯幾時兮奈老何。

（秋風起りて白雲飛び、草木黃落して鴈南に歸る。蘭に秀でたる有り菊に芳しき有り、佳人を懷ひて忘るる能はず。樓船を泛べて汾河

「秋風辞」における秋風と雲の表現について

を濟り、中流に横たはりて素波を揚ぐ。簫鼓鳴りて棹歌発し、歛樂極まりて哀情多し。少壯幾時ぞ老を奈何せん。）

『文選』では『漢武故事』を引用して、次の様に序文を付している。

上行幸河東、祠后土、顧視帝京、欣然中流与羣臣飲燕。上歛甚。乃自作秋風辞曰、

（上河東に行幸し、后土を祠り、帝京を顧視して、欣然として中流に羣臣と飲燕す。上歛ぶこと甚し。乃ち自ら秋風辞を作りて曰く、）

ここにある様に、河東において后土神を祀った後の、船上での宴会の席上、披露された作品であるという。

この点について何焯は『義門讀書記』巻四十九で、元の白斑の『湛淵静語』を引用しながら、次の様に述べる。

武帝祠后土者六。五幸河東、一幸高里。幸河東、皆在三月、独始立

祠雁上、乃元鼎四年十一月也。以詞物色考之、曰木落雁南。〈中略〉
詞作于此時無疑。

（武帝の後土を祠るは六たび。五たび河東に幸し、一たび高里に幸す。河東幸するは、皆三月に在るも、独り始めて祠を雁上に立つるは、乃ち元鼎四年十一月なり。詞の物色を以て之を考ふるに、木落ち雁南すと曰ふ。〈中略〉詞は此の時に作られしは疑ひ無きなり。）

ここでは、武帝の後土神祭祀において、秋に河東で行ったのは、記録から、元鼎四年のことで、「秋風辞」がその時の作であることは疑いがないと述べている。

この作品が武帝自身の作であるかについては議論のある所ではあるが、本稿は作品自体の表現と内容について論ずることが目的であるため、特にこの議論には関わらず、内容自体の検討を行ってゆきたい。

二、諸解釈について

この作品の冒頭部分に関する従来の注釈を見ると、前引『文選』の李善注では次の様にある。

礼記曰、季秋之月、草木黄落、鴻鴈来賓。

（礼記に曰く、季秋の月、草木黄落し、鴻鴈来り賓す。）

ここでは『礼記』月令を引用して秋の深まりを示す表現であるとしている。

張玉穀『古詩賞析』卷三には次の様にある。

首二就秋時景物蕭颯滿前、飄然叙起、已為結処老至可哀。

（首二は秋時の景物蕭颯として前に満つるに就きて、飄然として叙べ起こし、已に結処の老いの至りて哀れむべきを為す。）

この様に、秋のものさびしい景物を目前にして、自らの老いを意識し、始めの部分で既に終わりの部分について述べているとし、秋と老い、始めと終わりの部分の関連を指摘している。

尚永亮は古代人の常の思考として、例えば「秋」と「愁」など字音と字義を連想的に結び付けることが早くからあったことを指摘し、秋の景物から最後の「少壯幾時兮奈老何」という内省が生まれたと指摘する。

趙敏俐は、『楚辞』の「離騷」にある「日月忽其不淹兮、春与秋其代序。惟草木之零落兮、恐美人之迟暮（日月忽として其れ淹しからず、春と秋と其れ代序す。草木の零落を惟ひ、美人の遅暮を恐る）」や宋玉の「九弁」にある「悲哉、秋之為氣也。蕭瑟兮草木搖落而變衰（悲しいかな、秋の氣為るや。蕭瑟として草木揺落して変衰す）」とある点から、戦国時代になると秋の草木の衰えが人の生命を連想させるものとなり、秦漢以降、人生の短さを感じさせる悲秋の考えが広がり、漢の武帝も「秋風辞」でその悲哀を感じているのだと述べている。

また、何寄澎は「秋風辞」において、秋風が白雲を吹き散じて、草木黄落して雁が帰るといふ秋の光景の中に、歳月が過ぎて、命が消えゆく恐れを述べているとする。

この何寄澎の論に見られる様な、秋風と雲との関係について言及した論考は、もう一編、次に挙げる論考との二編の他には見られない。

小川環樹は、「秋風辞」における秋風と雲との関係について、次の様に述べている。

「秋風辞」の首めの二句はただ季節を叙したのではなく、歡樂極まって哀情多しの結びの二句と秋風起って白雲飛ぶの二句とは相照応するのであって、少壯の盛時ようやく過ぎ去って老年来たらんとするのが、あたかも春夏草木の生氣にみちた季節が去り、その黄ばみ落つる季節の来るのに比せられているのは多言を須めない。〈中略〉時には避くべからざる老年と死の運命の迫りつつあることを感

ずるのは人間として寧ろ当然でもあろう。そしてこの心情を正面からありのままに吐露した結びの二句に対し、秋風にさまよいゆく雲を述べた第一句が、やはりその不安の情を象徴する役目をはたしていると解しても必ずしも言いすぎではあるまい。

解釈の仕方は別として、「秋風辞」における冒頭の二句と末尾の末尾の部分とが対応しているという点は異論の無い所と思われる。しかし、そこに表現される「白雲」は「さまよいゆく雲」なのであろうか、それとも、前の何寄澎の論考で言う様な「吹き散じられる雲」なのであろうか。

以下に、その点について考えてゆきたい。

三、秋の風

秋に吹く風に人々が懐く印象について、『楚辞』、また、それを漢代に引き継いだ「辞賦」における用例を見てゆくと以下の様なものが挙げられる。

『楚辞』の屈原の「九歌」湘夫人には次の様にある。

嫋嫋兮秋風、洞庭波兮木葉下。

(嫋嫋たる秋風、洞庭波だちて木葉下る。)

〔王逸注〕言秋風疾則草木搖、湘水波而樹葉落矣。

(言は秋風疾ければ則ち草木揺れ、湘水波だちて樹葉落つ。)

〔洪興祖補注〕嫋、長弱之貌。

(嫋は、長く弱きの貌なり。)

〔朱熹集注〕嫋嫋、長弱之貌。

(嫋嫋は、長く弱きの貌なり。)

ここでは、秋風で洞庭湖は波立ち、木の葉が散る様が描かれている

「秋風辞」における秋風と雲の表現について

が、後漢の王逸はその風は疾いと言い、宋の洪興祖と朱熹は長く弱く吹く風と解している。

「嫋」の字義については、『説文解字』第十二篇下には「嫋、姆也(嫋は、姆なり)」とあり、同書同篇の「姆」には、「弱長兒(弱く長き兒)」とある。

洪興祖と朱熹の注は、この意に沿った解釈となっているが、作品の作られた時代に、より近い後漢の王逸が、秋の風は疾く吹くと解しているのは、以下に述べる様な、その当時の秋風の吹き方への認識を背景にしている。

同じく『楚辞』の漢の劉向の「九歎」逢紛には次の様にある。

秋風瀏以蕭蕭。

(秋風瀏として以て蕭蕭たり。)

ここでは秋風が疾く吹いて物寂しい音を立てていることを述べている。

同じく漢の枚乗の「梁王菟園賦(梁王菟園の賦)」では次の様に言う。

遊風踊焉、秋風揚焉。

(遊風踊し、秋風揚す。)

ここでは秋風が激しく吹く様が述べられている。

この様に、『楚辞』、また、漢代の「辞賦」において、秋風の性質を言う時には、速い若しくは激しいと述べる事が通例の表現となっているのである。

漢代の詩においては、楽府の「有所思」には次の句がある。

秋風肅肅晨風颯

秋風肅肅として晨風颯たり

ここでは秋風が速く吹く様を述べている。
また、楽府の「古歌」には次の様にある。

秋風蕭蕭愁殺人 秋風蕭々として人を愁殺し

出亦愁 出づるも亦愁へ

入亦愁 入るも亦愁ふ

ここでは、秋風は愁いを誘うものとして登場しており、秋風の吹く速さや強さは表現されていない。

後漢の班婕妤の「怨詩」には、次の様にある。

常恐秋節至 常に恐る秋節の至り

涼颺奪炎熱 涼颺炎熱を奪ふを

秋になって涼しい風が吹き、熱を奪ってしまうことを恐れると述べる。
この例も、前の例と同様、秋風の吹く速さや強さは表現されていない。

この様に、漢代の「辞賦」では、秋風を述べる時には、秋風の強さ、また、速さを述べているのに対して、漢代の詩においては、その様な用例は必ずしも多い訳ではない。

六朝になると、例えば魏の阮籍の「詠懷」には次の様にある。

秋風夙厲 秋風夙に厲しく

白露宵零 白露宵に零つ

ここでは秋風が早朝に激しく吹く様が述べられている。
呉の韋昭「秋風」には次の様にある。

秋風揚沙塵 秋風沙塵を揚げ
寒露沾衣裳 寒露衣裳を沾す

ここでは秋風が砂埃を巻き上げて吹く様が述べられている。
また、『芸文類聚』卷三三所引の晋の左思「雜詩」には次の様に言う。

秋風何烈烈 秋風何ぞ烈烈たる

白露為朝霜 白露朝霜と為る

ここでは秋風が激しく吹く様が述べられている。
同じく晋の夏侯湛「思婦歎」の詩には次の様にある。

秋風厲兮鴻鴈征 秋風厲しくして鴻鴈征く

ここでも秋風が激しく吹く様が述べられている。
また、梁の沈約「和王中書德充詠白雲詩」には次の様に述べられている。

秋風西北起 秋風西北に起り

飄我過城闕 我の城闕を過ぐるに飄たり

ここでは秋風が速く吹いて来る様が述べられている。
当然のことながら、六朝の秋風が述べられる詩においても、風が強くまた速く吹くという表現の作品ばかりではない。

例えば六朝宋の謝惠連の「擣衣詩」には次の様にある。

白露滋園菊 白露は園菊に滋く

秋風落庭槐 秋風は庭槐を落とす

ここでは秋風が槐の葉を落とすと言うが、秋風の強さや速さを述べている訳ではない。

こうした例も存在するが、秋風の強さの程度や速度について詠じた作品においては、いずれも秋風が強く吹く、または、速く吹くという表現が使われており、弱く、または、ゆっくり吹くという表現は見当たらない。

以上の例をまとめると、漢代の「辞賦」においては秋風は強く、また速く吹くという表現をするものが多いのであるが、漢代の詩においては、秋風の速さや強さについて言及した作品は必ずしも多いとは言えない。

漢代の宮廷文学は『楚辞』由来の「辞賦」であり、そこには『楚辞』由来の表現が伝わり易かったのに対し、詩は「楽府」など民間で歌われるものを中心であったため、『楚辞』由来の表現は、詩ではまだあまり広がりがない、詩が宮廷文学となる端緒となった魏以降、「辞賦」の表現を承けて、漸く広がりを見せて来るのではないだろうか。散文においては、後漢の崔駰の「四巡頌」には次の様な部分がある。

秋風厲而蟋蟀吟、氣之動也。

(秋風厲しくして蟋蟀吟するは、氣の動くなり。)

秋風が激しく吹く時にコオロギが鳴くのは、氣の変化によるものと述べている。

同じく後漢の臧旻「答陳琳書」には次の様にある。

但懼秋風揚塵、伯珪馬首南向。

(但懼る秋風塵を揚げ、伯珪(公孫瓚の字)の馬首の南に向ふを。)

ここでは、季節を示すのに、秋風が塵を巻き上げて吹くことを述べている。これも秋風が強く吹くことを述べたものと言えよう。

「秋風辞」における秋風と雲の表現について

この様に、「辞賦」の作品の一つである「秋風辞」前後の時代の人々にとって、『楚辞』また「辞賦」を中心として、秋の風の描写について、その速さや強さを表現する場合には、激しくまたは速く吹くという表現を用いており、それは秋風が強く、また、速く吹くものであるという認識が、当時の人々にあったことを示していると言える。

本章の冒頭に『楚辞』の屈原の「九歌」湘夫人の例を引用し、三種類の注を示した。後漢の王逸は秋風は疾いと解し、宋の洪興祖と朱熹は長く弱く吹くと解していたが、管見する所では、上述の如く、秋風の速さや強さの程度を言う表現を持つ用例においては、速い、強いと言うものばかりであって、長く弱いと言う例は無く、王逸の解釈が、当時の人々の秋風に対する認識に沿ったものであると言えよう。

四、秋の雲

秋の雲のイメージについては、それを示す用例は少なく、漢前後より時代を拡大して見てみると以下の様になる。

『南齐書』高帝本紀上では次の様に述べられている。

正情与曛日同亮、阴略与秋雲競爽。

(正情は曛日と同じく亮る、阴略は秋雲と爽を競ふ。)

ここでは、六朝齐の高帝の心は太陽と同じく、優れた才略は秋の雲と勢いを競うと述べられており、秋の雲が勢いのあるものとして認識されている。

また、唐の張誥の『宣室志』巻六には次の様にある。

蕭中郎曰、秋風利似刀。璟曰、秋雲輕比絮。

(蕭中郎曰く、秋風の利なることは刀に似たり。璟曰く、秋雲の軽きことは絮に比す。)

秋を詠ずる連句を作り合う中で、登場人物である蕭中郎は秋風の勢いは刀の様だと述べ、同じく登場人物の梁瓌は秋の雲の軽さは真綿の様だと述べている。

ここでは、秋風が勢いよく吹くという認識と、秋の雲が軽々と飛ぶものだという認識が示されている。

宋の徐積の詩「秋雲」には次の様にある。

西風休強住 西風強く住むるを休め

飛勢自翩翩 飛勢自ら翩翩たり

秋の雲が西風即ち秋風によってその場に留まることから放たれ、その飛ぶ勢いは素早いと述べられている。

ここでは、秋風に吹かれる雲は素早く飛んで行くものであるとの認識が示されている。

以上の諸例における秋の雲に対する認識は、勢いがあり軽々と飛ぶもので、勢いよく吹く秋風に吹かれて素早く飛んで行くものであるということが言え、漢より後の時代の用例ではあるが、雲への認識としては参考になるものと言えよう。

五、「大風歌」との関わり

漢代に風と雲を詠じた作品に、漢の高祖劉邦の「大風歌」がある。

『史記』高祖本紀には次の様にある。

酒酣、高祖擊筑、自為歌詩曰「大風起兮雲飛揚。威加海內兮歸故鄉。安得猛士兮守四方。」令兒皆和習之。高祖乃起舞、慷慨傷懷、泣數行下。

（酒酣にして、高祖筑を撃ち、自ら歌詩を為りて曰く「大風起りて雲飛揚す。威は海内に加はりて故郷に帰る。安くにか猛士を得て四

方を守らしめん。」兒をして皆之を和習せしむ。高祖乃ち起ちて舞ひ、慷慨傷懷して、泣數行下る。）

淮南王黥布の反乱を制圧し、帰路に出身地の沛に立ち寄った劉邦が人々を招いて宴を催し、その席上で、披露した自作の歌とされているが、ここでは、大風が吹いて雲が空へと飛び上る様が楚歌の形式で描かれている。

李善の説に従えば、⁽⁶⁾風が起き雲が飛ぶ表現は、世に混乱を齎す様な輩が天下を乱すことを指すと言う。

この歌では、風によって吹き上げられる雲の様が述べられている。この「大風歌」と「秋風辞」との関係について、鈴木修次は次の様に述べている。

「秋風起兮白雲飛」というたいはじめの発想は、高祖の「大風歌」の「大風起兮雲飛揚」を連想において生まれたものであろう。

この様に、「秋風辞」への「大風歌」の影響について指摘している。また、浅野通有は次の様に言う。⁽⁸⁾

「秋風」の句は、漢の高祖の「大風歌」の第一句「大風起兮雲飛揚」に本づくものであることは明らか。

二作品には、この様な影響関係があると考えられる。その様に考えるならば、「風」と「雲」との関係においては、「大風歌」で表現された、大風に吹き上げられる雲という形が、「秋風辞」の冒頭の表現に影響を与えていることとなる。

六、「秋風辞」における雲の表現

「秋風辞」における「秋風」と「雲」に関しての、これまで見て来た諸点をまとめておきたい。

秋に吹く風の表現について、最も古い例は『楚辞』九歌の「湘夫人」であり、ここでは秋風は速く吹くものとして扱われていた。

その後の『楚辞』また、それを漢代に引き継いだ「辞賦」においても秋風が強く、若しくは速く吹くという表現が用いられている。

その様な表現は漢代の詩にも見られるが、六朝時代に入り、秋風の強さ、速さを言う作品が多くなり、こうした表現は散文にも見られる。

この様に、『楚辞』に端を発する秋風の、強く速いというイメージは時代と経て定着してゆくのだが、『楚辞』の様式を踏襲する「秋風辞」の作られた漢代では、「秋風辞」も含まれる「辞賦」において、秋風は強く、速く吹くものという表現が定着していた。

秋の雲については、漢の高祖の「大風歌」で大風に吹き上げられる雲という表現がなされ、その後の時代において、強く吹く秋風に吹かれて飛んで行く雲というイメージが形成された。

以上の様にまとめられるが、本論第二章において、「秋風辞」に関する諸注釈を挙げた中、「秋風」と「雲」との関係について触れたものが二説あった。

一つは、何寄澎のもので、秋風が白雲を吹き散じる様子を言っているとする説であり、もう一つは、小川環樹のもので、秋風にさまよいゆく雲を述べた第一句が、やはりその不安の情を象徴する役目をはたしているという説であった。

しかし『楚辞』から「辞賦」へと続く秋風と雲とのイメージからは、「秋風辞」における、これら二説は正鵠を射ているとは言えない。

秋風と雲の持つ意味合いからは、秋の雲は秋風に吹かれて速く進むものであり、さまよっているものでも、吹き散らされてしまうもので

もないのである。

それでは、「秋風辞」における冒頭の部分はどの様に理解すべきであろうか。

「秋風辞」においては、風と雲が表現された後、草木が黄落して雁が南に帰るといふ秋の暮れゆく様が述べられている。

冒頭の部分において、強く吹く秋風により速く進みゆく雲を詠じることによって、その後が続く、暮れゆく秋の表現にも速度感が感じられる様になってゆき、秋が速く暮れてゆくことが示される。

そして、この表現は末尾にある「少壯幾時兮奈老何」の部分と対応している。

末尾の表現は、「少壯幾時」と「奈老何」に分かれているが、両表現共、反語表現となっている。

すなわち、「少壯幾時」は、人生において若く盛んな時期はどれ位の長さであろうかと言いながら、それは大して長い時間ではないと言い、「奈老何」では、この老いをどうすれば良いかと問いながら、どうすることも出来ない、止め様もない老いに向かう苦悩の情を述べている。

冒頭の表現では、秋風とそれに吹かれて進む雲とによって、秋の進みが速いことを実景として表現すると共に、末尾の人生の時間と対応させて、若く盛んな時期が短い中、人生の秋とも言える老いが止め様も無く速く進んでゆくことを、表現しているのである。

この作品が宴席において披露されたのであれば、聞いていた人々は最後の部分を聞いて、冒頭の実景が、実は末尾の伏線であったことに気付く驚くという趣向となっていたのではないかと思われる。

この様に、「秋風辞」における秋風と雲との表現は、当時の「辞賦」における秋風のイメージを利用し、それに吹かれる雲のイメージを「大風歌」に求めたものであり、かつ、作品の本旨である進みゆく老いへの不安を効果的に表そうとした表現なのである。

注

- (1) 例えば、浅野通有は論考「秋風辞考」(二)～(五)において、漢の武帝の作ではないとする論を展開している。『漢文学会会報』(國學院大學)一七、二〇、二二、二三、二四)
- (2) 尚永亮「悲秋意識初探」(『陝西師大學報(哲学・社会科学)』一九八八—四)
- (3) 趙敏俐「秋与中国文学的相思懷婦母題」(『中国社会科学』一九九〇—四)
- この様な、「秋風辞」を悲秋文学と見做すことは、ここに挙げた論文の以前から言われていることであるが、『楚辞』から「秋風辞」までの繋がりについて明確に述べている点で、ここに取り上げた。
- (4) 何寄澎「悲秋——中国文学伝統中時空意識的一種典型——」(『台大中文學報』七)
- (5) 小川環樹「風と雲——感傷文学の起原——」(『風と雲——中国文学論集——』朝日新聞社、一九七二年)一〇頁
- (6) 〔李善注〕風起雲飛以喻羣兇競逐而天下乱也。『文選』卷二十八)
- (7) 鈴木修次『漢魏詩の研究』(大修館書店、一九六七年)二四頁
- (8) 前掲注(1)浅野論文の(五)